慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	吉井勇の『生ひ立ちの記』について：不二書房版と臼井書房版
Sub Title	
Author	田坂, 憲二(Tasaka, Kenji)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2021
Jtitle	三田國文 No.66 (2021. 12) ,p.67- 80
JaLC DOI	10.14991/002.20211200-0067
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20211200-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

吉井勇の『生ひ立ちの記』について

――不二書房版と臼井書房版――

田坂憲二

はじめに

吉井勇の『生ひ立ちの記』は、幼年時代から青年期までを、短歌を交えながら記したもので、吉井勇の文学的出発を考察する上でも、伝記的事象を究明する上でも貴重な資料である。この『生ひ立ちの記』には、昭和初期に刊行された不二書房版と、戦後、二十年の歳月を経て刊行された臼井書房版の二種類がある。この二つは、分量的にも大きな差があり、加えて作品の内容もまた異なった方向を指向している。したがって、二つの『生ひ立ちの記』の内実はどう異なっているのか、その方向性の違いは何を意味するのかについて考える必要がある。

今日『生ひ立ちの記』として、最も一般的に読まれているものは、『吉井勇全集』第四巻に所収のものであろう。これは不二書房版を底本とするものであるが、『全集』の編集方針から、最末尾の五〇頁ほどが削られており、また原本にはない内題が補われたりしており、これを以て『生ひ立ちの記』とすることには問題がある。

以上のような理由から、改めてこの作品を取りあげて考察するものである。猶、作品名の表記は、不二書房版が「生ひ立ちの記」であり、臼井書房版は「生ひたちの記」で、一字だけ表記に相違があるが、論述の都合上、統一的な名称としては「生ひ立ちの記」の方を使用したことをお断りしておく。本論文のタイトルも以上の立場による。

猶、本稿末尾には、『吉井勇全集』に収載されていない臼井書房版の独自歌二十七首を一括掲出した。

一　『生ひ立ちの記』の本質

それでは『生ひ立ちの記』とは、どのような作品か。

この作品の本質を最もよく示しており、かつ、不二書房版と臼井書房版とでほとんど異同のない箇所を掲出して考えてみよう。本稿では、不二書房版、臼井書房版、共に架蔵本により、引用に際して仮名遣いは原文のままとしたが、漢字は新漢字に改めている。

第一篇「童心」の第三章「驢馬」は、「私は子供の時分あんまり体(からだ)が丈夫でなかつたので、一年の半は鎌倉にあつた父の別荘(ならはし)で過ごす習慣になつてゐた。この別荘は材木座の海岸に近い

ところにあつて、前の小高い砂山に隔てられて海を見ることは出来なかつたが、絶えず聞える浪の音は子供心にもかなり寂しかつた」と書き起こされ、「浪の音はいともはかなしいちはやく海はをしへぬ人の愁を」「われもまた御伽噺のなかにある王子のごとく海を見しかな」など五首の歌でその頃を回想する。

つづけて、この章の中核でもあり、章題になっている「驢馬」をめぐる記憶につないでゆく。「驢馬は父が支那から持つて帰つて来たもので」「私は早速それにふさはしいやうな鞍を置かせて、得々としてその背に跨がつて毎日そこいらの野路や海岸を乗り廻した」として、次のように述べる。

今でも私の手許には、この驢馬に乗つて映した写真がある。もう二十年も前の古い写真であるから、すつかり色が褪せてしまつてゐるが、それでも鶴ヶ岡の八幡宮の前で映したのだと云ふことは朧ろげながら背後に映つてゐる見覚えのある長い石段で分る。私は今でも時々この古ぼけた写真を出して見て、その時分のとりとめのない回想に耽りながら、涙を誘はれるやうな寂しい心持になることがある。

小さなる鈍機翁は今日もまた蜻蛉を狩ると驢に乗りてゆく

おもひでとなればおどけし長顔の驢馬にも涙誘はれしかな

馬に乗り生命の水を取りにゆくお伽ばなしの世をも夢みぬ（中略）

子供の時分のことを思ひ出してゐると、どんなことでも寂しくなるものだが、殊に私はこの驢馬に乗つてゐる写真を出してじつと眺めてゐると、全く死にたくなるやうな寂しさを覚える。それと云ふのは私はこの写真を見てゐると直きに「死」と云ふことを考へさせられるからである。

この古ぼけた懐かしい写真には、驢馬に乗つてゐる私の外に、私とは三つしか年の違はない若い叔父と、それから私の直ぐ次の弟とが映つてゐるのであるが、この三人のうちで現在この世に生きてゐるのは私一人ぎりで、あとの二人の叔父も弟も、今ではもう冷たく墓の下の土の中で眠つてゐる。（中略）

たまきはる命短きかなしみをはやくも知りしわれなりしかな

おとうとよ墓は寂しく寒からむこの冬の夜をいかに眠るや

現身の死をかなしめば砂山も墓のごとくに思はれしかな[1]

短歌は、前半の「小さなる」に始まる歌群は五首、後半の「たまきはる」に始まる歌群も五首であるが、ともに最初の三首のみを掲出した。前半の三首は、「得々としてその背に跨がつて」驢馬を「乗り廻し」ていたころの甘美な思い出である。「涙を誘はれ」ているのも、もはや戻ることのない時間、失われた時間に対する甘美な涙であると言って良かろう。「子供の時分のことを思ひ出してゐると、どんなことでも寂しくなるもの」というのも、そうした思いの一環として捉えるべきである。

ところが、驢馬に乗った自分と叔父と弟の写真のことから、「死」を意識する思いへと転じていく。一緒に映っている「叔父も弟も、今ではもう冷たく墓の下の土の中で眠つてゐる」からである。では、この二人が亡くなったのは、いつのことであろうか。「命短きかなしみをはやくも知りし」とあり、「おとうとよ墓は寂しく寒からむ」とあり、叔父と弟の二人とも、少年吉井勇の前から程なく姿を消したように読めるのではなかろうか。三首目では、そうした肉親の相次ぐ死に直面した少年の目に映じた材木座の海岸を、「砂山も墓のごとくに思はれしかな」と歌っているように受け取れる。

『生ひ立ちの記』の魅力は、地の文の事実に基づいた叙述と、その叙述に導かれる様々な思いを歌の世界に封じ込めたことにある。そしてそこには、一種の虚実皮膜の巧緻をつくした構造があるのである。この部分では、人の生死について書かれているので、虚実の境界を最も見やすい形で析出することが出来る。吉井勇は、明治十九（一八八六）年生まれ。「三つしか年の違はない若い叔父」とは、父幸蔵の末弟で明治十五（一八八二）年生まれの栄助（英介）のことである。実際には四つ違いであるが、記述と殆ど一致するとしてよかろう。「直ぐ次の弟」とは明治二十二（一八八九）年生まれの中である。栄助、中の二人とも、たしかに早世しているのだが、栄助が没したのは明治四十（一九〇七）年、吉井勇二十代のはじめである。中は病気がちであったが、大正七（一九一八）年の没で、吉井勇はすでに三十代である。[2] 叔父の死も、弟の死も、少年時代ではなく、後年のことなのである。[3]

後述する如く、最初の『生ひ立ちの記』は「歌物語」としての側面を強く持っている。「物語」が事実に依拠しても、その上に虚構の像を重ねることが許されるならば、「歌」にもそれが許されるはずである。「命短きかなしみをはやくも知りし」とは、少年の死の恐れと悲しみの表出であり、「おとうとよ墓は寂しく寒からむ」は、亡き人への少年の哀切な思いである。事実として、少年吉井勇にとって、死は身近にあり、恐れ悲しむべきものであった。『生ひ立ちの記』の冒頭に記されている祖父吉井友実の死や、「驢馬」の前章である第二章「高輪の家」に記された愛犬の死や、そのほか身近な人々の死を、この章では、早世した叔父・弟の姿に重ね合わせて表出したものであると捉えるべきであろう。

二　不二書房版『生ひ立ちの記』

不二書房版『生ひ立ちの記』は、四六判貼箱入、丸背、天金、上製本、本文二四二頁。昭和三（一九二八）年六月十日に刊行された。以下に、全体の構成と、所収歌数を示す。

「生ひ立ちの記」序歌　九首

第一篇　童心

第一章　公孫樹　二一首
第二章　高輪の家　三五首
第三章　驢馬　二〇首
第四章　忘れえぬ人々　四〇首
第五章　初恋　一五首
第六章　薔薇畑　一五首

第七章　うき世の波　一五首
第二篇　水のほとりに
第一章　厭世　一〇首
第二章　夢の女　一〇首
第三章　老僕　一五首
第四章　獺の話　一一首
第五章　即興詩人　一六首
骨牌の思ひ出　三〇首
はげあたま　三五首
いさな船　二三首
酔狂録　四〇首
緑の窓帷　四〇首
髑髏の絵　一六首
明眸行　八五首
亜剌比亜人形　三三首
（総歌数五三四首）

一見して、二篇十二章に整然と分かたれた前半部と、タイトルだけが列挙された後半部とから構成されていることが分かる。後半部は、一層歌物語的傾向が顕著になっているが、虚構の度合いの強弱こそあれ、吉井勇自身の体験や記憶が根底に潜められているものである。それらが分かりやすい形で、あらわれている例を列挙しておく。

骨牌の思ひ出　それはもう二十年あまりも昔のことで
はげあたま　私が…尾久の水荘に住んでゐた時分のこと
緑の窓帷　私がまだ一人で鎌倉の阪の下の小さな家に
髑髏の絵　十数年前…新橋の裏通り…私も無論毎晩そこに
明眸行　その翌日私は…戯曲「葡萄棚」の稿を続けた

これら以外でも、「それはまだ私が七つか八つ位の子供の時分のことであつた。（さう云つて私の友達は語りだした）」と、友人の回想の形式を取っている「いさな船」であっても、友人の父親が「捕鯨事業を始めた」ことから語り始められており、房総半島に拠点を置いているその姿は、吉井勇自身の父親幸蔵の姿にほかならない。「いさな船」を含めて、一見独立性が高いように見える「骨牌の思ひ出」以下の歌物語が、それ以前の部分と一緒に『生ひ立ちの記』という書物としてまとめられたことは、当然の帰結であったのである。

不二書房版の『生ひ立ちの記』の書名表記の揺れも、そうしたことを明瞭に示している。箱には大きな題箋が貼られ、罫線で三行に分かたれ「吉井勇著」「生ひ立ちの記」「東京　不二書房版」と記されている。本文の扉も完全に同じ形である。その一方で、箱の背と、書物本体の背には「歌物語　生ひ立ちの記」と記されているのである。目次冒頭には「歌ものがたり集（角書）　生ひ立ちの記　目次」とあり、本文の末尾にも「歌ものがたり集（角書）　生ひ立ちの記　終」と記される。まさしく、歌物語的に語られた、幼年時から青年時の記憶と記録であった。この歌物語的性格が臼井書房版ではどうなっているか

が、最大の問題であるが、その前に、不二書房版を底本としている、『吉井勇全集』の『生ひ立ちの記』について見ておく必要がある。

三　『吉井勇全集』所収『生ひ立ちの記』

今日『生ひ立ちの記』を読もうとするとき、最も入手しやすいのは『吉井勇全集』所収のものである。

『吉井勇全集』の名前で呼ばれるものは三種類がある。

①『吉井勇全集』番町書房　八冊　昭和三十九（一九六四）～四十年

②『定本吉井勇全集』番町書房　九冊　昭和五十二（一九七七）～五十三年

①に増補したもの

③『定本吉井勇全集』日本図書センター　九冊　昭和六十三（一九八八）年

②を版面複製したもの

②③が同じものであるのは当然であるが、『生ひ立ちの記』の本文や解説文に関しては、元版の八冊版も、定本と冠した九冊版との間に相違はない。本稿では、②の『定本吉井勇全集』を使用する。

①の最初の全集以来一貫している編集方針として次のものがある。吉井勇の単行本作品を収載するに当たって、複数の版がある場合には、初版・元版に拠るという立場である。『酒ほがひ』『玄冬』の歌集をはじめとして、吉井勇の作品には、年月を隔てて復刊・再刊されるものが少なくない。その時に判型が異なったり、出版社が変わったり、改編されたりするものもある。一例を挙げれば『定本吉井勇歌集』という自選歌集は、戦時下や出版社統合という特殊な事情にもよろうが、昭和十八（一九四三）年甲鳥書林A五判上製、昭和二十年養徳社四六判並製、昭和二十二年養徳社横本箱入改編版と、めまぐるしく変化している。こうした事情があるから、便宜上初版・元版に依拠するという立場は、一つの考えとして容認出来るものである。もちろん完璧を期するためには、異版の本文との綿密な校異を掲出する必要があるのは言うまでもない。

さて、上記の方針であるから、『全集』が不二書房版を底本とすることには一貫性がある。『全集』第四巻の三八一頁から四五九頁までが『生ひ立ちの記』であるが、冒頭に不二書房版の書影が掲げられ、本文も当然不二書房版のものである。ところが、そこでは、底本の不二書房版の冒頭の四頁と、最後の五〇頁程度が削られているのである。つまり『定本吉井勇全集』の『生ひ立ちの記』は完本ではないのである。

『定本吉井勇全集』の『生ひ立ちの記』を目次で示せば「生ひ立ちの記」「骨牌の思ひ出」「はげあたま」「いさな船」「酔狂録」「緑の窓帷」「髑髏の絵」である。不二書房版からは、「序歌」「明眸行」「亜剌比亜人形」の三箇所が削られている。その経緯については、「「明眸行」「亜剌比亜人形」などのような独立した文章で重複しているものはいうまでもなく削除した」と同書解説に述べられている。『全集』第四巻には、『明眸行』（天弦堂書店、大正五（一九一六）年。「明眸行」「女優伝」「厭世紀」「恋愛異聞」「亜剌比亜人形」からなる）も収載され

ているから、そちらを見よということなのであろう。『全集』のこうした方針そのものについて疑念があり、またその作業も杜撰な点があることは旧稿で述べたので再述しないが、[4]「明眸行」「亜剌比亜人形」の二つの本文も、『明眸行』所載のものと『生ひ立ちの記』所載のそれとでは、句読点の位置も異なり、完全には同文ではないのである。まして、『全集』巻末の解説に回されてしまった、「序歌」四頁に含まれた九首の歌は、そのすべてがこの作品のために新たに詠まれたもので、作者の心情を過不足なく表している。しかも他の歌集には再録されなかったものであるから、歌人吉井勇の全集としては、第一級資料として是非とも本文に掲げるべきものであっただろう。

しかし、それ以上に看過できないのは、『全集』の『生ひ立ちの記』の目次の表記そのものが、底本とは異なっているということである。『全集』の目次には、「生ひ立ちの記」が「骨牌の思ひ出」と並ぶ形で記されている。不二書房版では「生ひ立ちの記」という名称は、あくまでも書名であって、目次に章題のように掲出されるものではない。これが『定本吉井勇全集』のような表記だと、「生ひ立ちの記」が「骨牌の思ひ出」「はげあたま」「いさな船」「酔狂録」「緑の窓帷」「髑髏の絵」と同格になってしまう。『全集』編者は、第一篇と第二篇の部分を、「骨牌の思ひ出」や「はげあたま」と同格の、「生ひ立ちの記」という一つの歌物語として並列しているのである。実際、『全集』三八〇頁では「第一篇　童心」の前に底本にはない「生ひ立ちの記」の文字が、「骨牌の思ひ出」以下のタイトルと同じ大きさの活字で、同じ高さに記されているのである。作品の理解は個々に委ねられるものであるからさて措くとしても、あたかも原本が、こうした体裁で構成されているかのように誤解を生むような改変は、絶対に避けなければならない。原本の一部を削除することは、全集全体の分量の問題などもあって、やむを得ないという考えもあるだろうが、原本にない文字は、たとえ一字一句であっても付加してはならない。強く戒めなければならないことである。

四　臼井書房版の形態

臼井書房版『生ひたちの記』は、昭和二十四（一九四九）年一月五日刊。四六判角背のすっきりとした装幀で、表紙の書名は朱の題箋状のデザインで子持ち枠の中に「生ひたちの記　吉井勇」と記す。背表紙も同じく朱の題箋状であるが、薄冊のため枠はない。造本から考えて箱は存在しないと考えて良いが、カバーの有無は確認出来ない。[5]本文扉は下部に空白をたっぷり取り上部の枠内に書名などを記す。そこでは、横長の朱色の子持ち枠の中を三行に分割し、真ん中に「生ひたちの記」と朱文字で大きく、両側に「吉井勇著」「臼井書房刊」と小さく通常の黒文字で印刷する。朱色を、シンボルカラーとしたような、瀟洒な装幀である。書名の問題については本節で後述する。本文頁は全一八一頁で、不二書房版に比べて約六〇頁分少なくなっている。一頁一五行であった不二書房版に対して、一頁一〇行で大きめの活字でゆったり組んでいるから、分量的には半減していると言えようか。それでは、臼井書房版は、不二書房版の単なる圧縮かというとそうではない。重要な改編が見られる

のである。臼井書房版の目次を示してみよう。

第一篇　童心　二一首
　第一章　公孫樹　三五首
　第二章　高輪の家　二〇首
　第三章　驢馬　四〇首
　第四章　忘れえぬ人々
第二篇　少年の悲しみ　一四首（一首削除）
　第一章　初恋　一〇首（一首追加　二一首削除）
　第二章　骨牌の思ひ出
　第三章　薔薇畑　一五首
　第四章　うき世の波　一五首
第三篇　蘆のそよぎ　一〇首
　第一章　厭世　一〇首
　第二章　夢の女　一五首
　第三章　老僕　一一首
　第四章　獺の話
第四篇　悪の巷　一六首（一首追加　一首削除）
　第一章　即興詩人　一〇首（すべて新作）
　第二章　寄席通ひ　一五首（すべて新作）
　第三章　或る転機
（総歌数　二五七首）[6]

上述したように、臼井書房版は、不二書房版に比べて量的には半減していると思われるのだが、それは総歌数の比較からも窺えよう。個別の章では、「骨牌の思ひ出」は不二書房版の三分の一に圧縮されているから、歌数もそれに比例して減少している。それ以外の共通する章では、歌数に変化がないか、一首程度の差し替えに止まる。すなわち、最小限の修正に止まっていることが看取されよう。もちろん、歌数に変化のない章でも、丁寧に手が入れられており、仮名遣いの修正や、漢字・仮名の表記の変更のほか、「高輪やこれも奢りのひとつとていと逞ましき犬飼ひにけり」（不二書房版・高輪の家）「高輪の家の奢りのひとつとていと逞ましき犬飼ひにけり」（臼井書房版・同）、「冬の夜の夜がたりをかし声立てて暖炉（ストーブ）の火もともに笑へば」（不二書房版・獺の話）「冬の夜の夜がたりをかし声立てて炉の火も笑ふごとく思へば」（臼井書房版・同）などがある。地の文に関しても、再版に際して丁寧な見直し・修正が行われているから、文章の小さな改変ならば、ほぼすべての章にわたっている。これも一例のみ上げれば、第一篇第二章「高輪の家」に登場する、少年勇の愛犬の名前が、不二書房版では「玉」であったものが、「ベア」と改められている。前掲した歌の表現「いと逞ましき犬」には、こちらの名前の方が相応しいであろう。もちろん、似つかわしいから「ベア」が、吉井家の飼った犬の実際の名前であったと断じるのは倉卒に過ぎよう。物語として一貫性を持たせるために「逞ましき犬」に相応しいように名前を替えた可能性の方が強いのではないだろうか。猶、このことは六節の問題とも関連する。

さて、臼井書房版の再構成の根幹は、概ね以下のようになろう。

全七章と長大であった不二書房版の第一篇の「童心」を、時系列にしたがって二つに分割する。新しい第一篇は「童心」の名前をそのまま継承し、第二篇は「少年の悲しみ」という篇名を新たに立てる。不二書房版の後半の、歌物語的色彩が一層濃厚な部分にあった「骨牌の思ひ出」の文章から、約半分を抽出して、同じ題名で新たな第二篇第二章とする。この一章を追加することによって、不二書房版の第一篇全七章を、臼井書房版では、第一篇全四章、第二篇全四章に再構成する。

不二書房版第二篇の「葦のそよぎ」全五章から、最後の「即興詩人」を除いて、篇題はそのままに第三篇全四章とする。新たに第四篇「悪の巷」を立てて第一章に「即興詩人」を持ってくる。第二章「寄席通ひ」、第三章「或る転機」の二章を新たに追加する。猶、不二書房版の序歌は臼井書房版に継承されていない。

要するに、臼井書房版の改編の根幹は、①全体を全四篇で、各篇を三〜四章のバランスの取れた形式にすること、②不二書房版の後半を削除（再構成された「骨牌の思ひ出」は除く）すること、③第四篇の「寄席通ひ」「或る転機」を新たに書き加えたこと、以上の三点にある。形式としては①が重要だが、内実としては②③の方がはるかに重視すべきものである。すなわち、不二書房版では濃厚であった歌物語的色彩を薄めて、伝記的色彩・回想記的色彩を濃くしたと思われるのである。「生ひ立ちの記」という名称から読者が予想するものに近づいたと言えようか。書名表記にもそれは明確に現れていて、不二書房版の背表紙などにあった「歌物語」などの文字は、臼井書房版には一切見られない。表紙、背表紙、扉、奥付、すべて「生ひたちの記」で一貫しているのである。[7]

したがって、第四篇の第二章「寄席通ひ」第三章「或る転機」として何が追加されたかこそが、最も重要な問題であるが、それは節を改めて述べることとする。

五　臼井書房版の目指したもの

不二書房版の『生ひ立ちの記』は、ほぼ時間軸に沿うような形で構成されている第一篇・第二篇と、その位置づけが難しい後半部とにわけられていた。前半は、吉井勇一家の居所によって、第一篇を高輪時代、第二篇を尾久時代という言い方をすることもできよう。後半部の「酔狂録」「緑の窓帷」「髑髏の絵」「明眸行」などは更に後年の青年期の吉井勇の姿が描かれているが、その中には高輪時代の記憶に繋がる「いさなとり」や、明らかに尾久時代の出来事である「はげあたま」などが置かれている。それら後半部の中の一篇「骨牌の思ひ出」が、臼井書房版の第二篇（不二書房版では第一篇の後半）の高輪時代に組み込まれるときにどのような操作がなされているかを見れば、二種類の『生ひ立ちの記』の特色が浮き彫りにされると思われる。

不二書房版の「骨牌の思ひ出」は、その「二つ三つを、心に浮ぶまゝに断片的に書いていつて見やう」という序文が冒頭に置かれ、以下三部構成となっている。その一は、「大名歌留多」の思い出である。「子供時分一番最初に知つた骨牌」は、「私の家が高輪に移つて来たばかりのことだから私がまだ六つか七つ

位の時分のこと」であったかと回想する。その二は、「それから二三年過ぎて」であるから、吉井勇が八、九歳の頃のことである。「馬丁部屋」で行われていた花骨牌と、金銭を掛けた勝負に熱中する人々の姿が描写される。その三は、更に「それから五六年経つて」「中学に通ひ始めたばかり」の頃である。「『金色夜叉』の最初の場面」を彷彿とさせる、正月の百人一首の思い出である。女世帯の妹娘に対する複雑な思いも描かれる。三つの話全体に、禁断の世界の入口に立った少年のたじろぐような、あこがれるような思いを通底させ、しかも三部すべてが異なった時期、異なった骨牌につながる記憶であるという、巧みな構成である。前後、十年近くにわたるこの話を、臼井書房版では二の話を中心に取り出して、高輪時代の後半の中に位置づけている。骨牌をめぐる思い出話を解体して、時間軸によって統一されている記事の中に挿入したのである。時間軸の強力な磁場のもとに記事を統一する。これこそが臼井書房版の特色と言えよう。

さて、全く新しく書き下ろされた第四篇の第二章「寄席通ひ」、第三章の「或る転機」とはどのような内容であろうか。

第四篇第一章の「即興詩人」は、府立一中から攻玉社中学に転じた吉井勇が、森鷗外の『即興詩人』を読んで「自分のアヌンチヤタを或る場末の寄席の舞台の上に見出して以来、自ら即興詩人アントニオを以つて任ずるやうになつたのである」と結ばれている[8]。

「寄席通ひ」は、それを直截的に受ける形で「『即興詩人』のアヌンチヤタは、華やかな劇場の脚光を浴びて、喝采の声と花束の渦の中で妙技を演じた女優だつたが、私のアヌンチヤタは、場末の寄席の狭苦しい舞台の上で俗悪な演技を見物に観せて、卑近な掛け声と空疎な拍手を得てゐるやうな女歌舞伎の役者であつた」と書き起こされる。この役者に夢中になり、「夢寝にもこの女を忘れることが出来」ずに、寄席通いをするというのが章題の由来である。一方で「文学に対する熱情」も「深く高ま」り、「鏡花の『照葉狂言』は、書かれてあることが女歌舞伎に似通つた世界であるだけに、私はまるで自分がその物語中の人物であるやうな心持がして、夢中になつて読み耽つた」と続ける。そして「私の寄席通ひは、その女歌舞伎の一座が旅興行に出て、私のアヌンチヤタを舞台の上に見られなくなると、不思議な程あつ気なく止んでしまつたけれども、私の文学に対する熱情だけは、さうやすやすとは消え去らなかつた」と結ぶのである。『照葉狂言』は明治三十三（一九〇〇）年、『即興詩人』は明治三十五（一九〇二）年に、ともに春陽堂から刊行されているから、吉井勇が読んだのはこれらの本であったろうか。後年の吉井勇が、敬愛して止まなかった森鷗外と泉鏡花[9]、この二人の作品との出会いを、文学的出発の起点と位置づけようとしているのであろう。

もちろん本当の意味での吉井勇の文学的出発は、新詩社の同人となったことに置くべきであろう。次の「或る転機」では、中学卒業後病を養っていた吉井勇が、療養生活の中で、与謝野晶子や鉄幹の作品などを読み耽り、「明星」の歌風に惹かれ、新詩社に入社することが書かれている。そして、自分の人生の「第一の転機は、この病気に依つてはからずも得た、歌作を動

機とするものではないかと思ふ」と記している。「寄席通ひ」「或る転機」の二章は、その後の文学者としての生き方の起点をそこに置くことで、自らの少年時代を綴ったこの作品を締めくくろうとする強い構成意識によって書かれたものであることが看取出来る。それは自由に飛翔する歌物語的要素を希薄にして、自身の文学的出発の起点を語る伝記性の強い作品へと、新しい『生ひたちの記』として再生させようとしたとも言うことが出来よう。

ただし、臼井書房版の『生ひたちの記』を吉井勇の伝記資料そのものとして読むことについては禁欲的であらねばならない。歌物語的要素は希薄になりこそすれ、皆無となったわけではないからである。

吉井勇は、中学卒業後、肋膜を病み療養生活に入る。吉井勇の伝記資料として最も頻繁に使用される「私の履歴書」[10]には、明治三十八（一九〇五）年四月攻玉社中学を卒業した後に「間もなく肋膜を病んで、平塚の杏雲堂病院に一年近くも入院した後、鎌倉の坂の下に貸別荘を借りて、そこで転地療養することになった」とある。『短歌文学全集　吉井勇篇』（第一書房、昭和十二（一九三七）年）巻末の自作年譜には、もう少し詳細に、「四月、攻玉社中学を卒業す。試験の前より肋膜を病み…間もなく病重りて平塚杏雲堂病院へ入院。次弟中、少妹国子、ともに枕を並べて病臥す。七月、国子杏雲堂病院に死す。病院の許しを得て、遺骸と共に帰京。」と記されているのである。病臥中の吉井勇にとって同じ病で妹が世を去ったことは、強烈な印象と死への恐怖を刻んだに相違ない。弟中については第一節で見た通りである。

以上二つの資料では、吉井勇が入院していたのは、平塚市の杏雲堂病院であるのだが、『生ひたちの記』「或る転機」には「茅ヶ崎の海岸にあつた或る病院の一室で濤声を聴きながら時を過すやうなことになつた…私の妹も同じ病気で、私と殆んど同時位に同じ病院に入院してゐたが…到頭ここで世を去つてしまつた」と記されている。茅ヶ崎の結核療養施設として、直ぐに想起されるのは、国木田独歩などが療養した南湖院である。「松林の中にあつて、極めて閑寂なところ」というのも一致する。これは、吉井勇の記憶違いではなく、作品としての（本稿の言葉を使えば、歌物語としての）虚構と考えるべきではなかろうか。具体的な病院名、療養所名を出さずに「ある病院」という朧化した書き方をしていることもそれを推測させる。杏雲堂病院よりも一駅東に位置し、同じく相模湾に面していてほとんど環境が同じである茅ヶ崎の南湖院のイメージを借りて、療養の時空と、当時の吉井勇の不安を鮮明に読者に伝えようとしたのであろう。「或る転機」には、「その頃私は、国木田独歩の書いたものを愛読してゐたが、その中でも私に強い感動を与へたものは、『運命論者』といふ小説であつて」と記されている。「その頃」とは厳密には、退院後、鎌倉の由比ヶ浜近くに住んでいたころであるから、鎌倉の海岸から始まる『運命論者』の主人公に「私」が重ねられる構成になっている。そのことを考えても、南湖院の国木田独歩のイメージが、「或る転機」の根底にあることは疑いのないことであろう。

もう一つ、「或る転機」では、鎌倉生活の時点で「晶子の

『みだれ髪』『小扇』鉄幹の『紫』」などを読み耽ったと書いていることにも注目したい。上述した『短歌文学全集　吉井勇篇』の自作年譜には、明治三十五（一九〇二）年の項目に、「与謝野鉄幹の『紫』同晶子の『みだれ髪』を愛読す」とある。肋膜で療養した年の三年前、府立一中三年生の頃にすでにこれらの本を読んでいたのである。自作年譜には、鎌倉の病後の日々の中で「歌を学ばむとする念漸く強く、遂に与謝野鉄幹先生に手紙を送つてその門に入らむことを乞ひ、新詩社に加盟す」とあり、この「或る転機」には、さらに鉄幹から「歌は禅の如きものに御座候」との手紙を貰ったとも記されているが、ここに『みだれ髪』や『紫』の読書体験をあえて重ね合わせることによって、歌への傾倒、明星派への傾倒を強く位置づけようとしたのであろう。

森鷗外の『即興詩人』によって導かれた文学への扉であったが、不二書房版の『生ひ立ちの記』は、その扉の前に立った段階で断ち切られて、後半の歌物語へと流れて行ってしまっていた。臼井書房版の『生ひたちの記』は、あらためてその後を書きつぎ、「寄席通ひ」を経て、病を得てそれから立ち直るという「或る転機」を経て、文学の扉を大きく押し開けて、その道に踏み込んでいく様まで描くことによって[11]、この作品の一つの結末としたのであろう。

六　『生ひ立ちの記』の本質・再び

改めて確認しておきたいのは、臼井書房版が伝記性に傾斜すると言っても、あくまでも歌物語的虚構性の範囲内であるということである。不二書房版を踏襲した部分にも、逆に具体的表現を捨てて抽象的な表現に改め、物語性を強める箇所があるので、最後にそれを紹介しておこう。それは、臼井書房版第二篇第一章「初恋」（不二書房版では第一篇第五章）の箇所である。

大山元帥をすぐに想起させる「亡くなつた叔母の嫁いでゐた、或るかなり名高い将軍」の凱旋の日の出来事である。その場の雰囲気になじめずにいる少年に、一人の少女が近付いてくる。不二書房版では、その少女は「『まあ、如何なすつたの、涙ぐんで。』と云ひながら、年嵩らしい様子で私の顔をしげ〳〵と見つめた。それは私の従姉にあたる、私よりは五つ六つ年上の、才媛らしい顔付をした娘であつた」と記されている。これが、臼井書房版では、「『まあ、如何なすつたの、涙ぐんで。』と年嵩らしい様子で云つたのは、私よりは五つ六つ年上の才媛らしい顔付をした娘であつた」と改められている。

つまり、この少女が誰であるかの限定要素である「私の従姉にあたる」の表現を削除したのである。この「従姉」が、大山巌の娘であるとすれば、早世した長女信子（『不如帰』の浪子のモデル）や、のちに「心の花」の歌人となる次女の留子（渡辺千秋の子の千春に嫁ぎ渡辺姓。心の花叢書『歌集高原』などを刊行している渡辺とめ子。竹島きみ子のペンネームでは、「姉『不如帰』の浪子を語る」（『婦人公論』昭和九年三月号）のほか、吉井勇が主宰した『相聞』（太白社）にも寄稿している。）となろうが、そうしたことを詮索することは、この作品の正しい理解には邪魔になるだけであろう。もちろん吉井勇には多くの叔父・叔母がいるから、大山巌の娘に限定する必要は

ない。しかし、いろいろな意味で著名なこの「従姉」の存在は、虚実のあわいを浮遊する『生ひ立ちの記』にとっては、事実関係に強く引きつけられてしまうこととなる。改版に当たって吉井勇はそれを避けようとしたのであろう。二つの文章を比較すると、不二書房版の方が安定感があり、「年嵩らしい様子で云つたのは」以下の臼井書房版の文章は、無理に切り詰められた印象が拭いがたい。それだけに、多少の無理をしてでも、虚から実へと傾きすぎてしまう表現を回避したいという吉井勇の強い思いが伝わってくるようである。

このあと「しよんぼり眺めてゐたところだつたので、かうやつて優しい言葉をかけられるのが、どんなに嬉しかつたか知れなかつた。私は喜んで彼の女に誘はれるまゝに、みんなの遊び夥伴（なかま）に加はつた」と記し、その少女に声を掛けられたときの思い出が、「初恋」というこの章のテーマに通じてくるのである。ところが、臼井書房版では、「どんなに嬉しかつたか知れなかつた」のあとに、わざわざ「それは何処の如何なる家の娘か分らなかつたけれども」という一文を加えている。これは「従姉」云々を削除したために、バランスを取るために附加された一文である。「初恋」の女性を、一層深い霧の中にでも置こうとする意識であろう。

このように、臼井書房版でも失われていない歌物語性は、この作品の本質であったと言うべきであろう。

おわりに

吉井勇の『生ひ立ちの記』は、戦前の不二書房版、戦後の臼井書房版とがあり、それぞれ異なった魅力がある。従来は、不二書房版のみが注目されてきたのだが、それは改めなければならない。

不二書房版は、自叙伝と歌物語の融合を目指したものであったが、次第に歌物語性が強くなって、自伝的要素は放擲されたようである。特に後半には、自身の体験や経験にもとづく素材も、あえて他人の経験として、虚構性を強調しようとしたものもあった。虚構、物語、歌物語へと大きく傾斜する過程が見出せる。

一方、戦後の臼井書房版は、歌物語性の強かった不二書房版の後半をすべてそぎ落とし、自叙伝風の前半の完成を目指したものである。歌物語性は希薄になったが、作品の中には依然として残存しており、書き加えられた部分にも、あえて事実とは異なる素材の配置なども見られる。

不二書房版の『生ひ立ちの記』は、自叙伝的要素を内包した歌物語であり、臼井書房版の『生ひたちの記』は、歌物語性を内包した自叙伝であると言えば良かろうか。歌物語と自叙伝と、この二つの世界を自由に往還するのが、この作品の魅力であると言えよう。

注

（1）この部分の引用は不二書房版により、臼井書房版の異同を以下に掲出する。①二十年も前→（臼）四十年も前　②私とは三つしか→（臼）私と三つしか　③あとの二人の叔父も弟も→（臼）あとの二人は叔父と弟も。①は刊行年次が約二十年後だから、当然の修正。③は元版では「二人の叔父」と読まれる危惧があり、臼井書房版では

「叔父」と「弟」の二人であることが明確になる。猶、『全集』では「この写真を見てゐると直きに」の部分で「直きに」とルビが附されているが、不二書房版、臼井書房版共にこの箇所にルビはない。

（2）関係者の生没年については、『和歌文学大系』二九巻『桐の花・酒ほがひ』（明治書院、平成十（一九九八）年）の鷺只雄の解説が、もっとも詳細で、正確にまとめているのでそれにしたがう。

（3）次弟中は、吉井勇が中学卒業後肋膜を患って療養していたときに、同じ病院に入院していた。五節参照。

（4）田坂「吉井勇の歌集『金泥』について」『三田国文』六四号、令和元（二〇一九）年一二月。

（5）臼井書房版を四冊ほど入手したが、いづれも古書店で新たに掛けられたグラシンのみであった。京都府立京都学・歴彩館には、吉井勇旧蔵の『生ひ立ちの記』があるが、これにもカバーはない。

（6）臼井書房版の独自歌については、末尾の一覧表を参照のこと。

（7）内扉に「生ひ立ちの記」とあるが、箱・表紙・扉・奥付「生ひたちの記」で一貫しており、これは誤植と考える。

（8）この文章のあと「うつつなく其角の墓のある寺のまへも通りて幾町か来し」などの四首の歌が末尾に置かれている。「其角の墓のある寺」とは、当時高輪にあり、域内に二本の榎があったため、二本榎の地名の由来と言われる上行寺のことである。また、『即興詩人』については、「昔の愛読書　即興詩人」（『歌境心境』湯川弘文社、昭和十八（一九四三）年）に、「広告を見てから出るのを待ち兼ねるやうにして、忘れもしない三田通りの慶応義塾の直ぐ下にあつた、福島屋といふ本屋でそれを買つて、その夜一気に読了してしまつた」という発言もある。

（9）泉鏡花や森鷗外に対する吉井勇の敬愛の念は、歌や散文から多く拾うことが出来る。一例のみ挙げれば、歌集『鸚鵡杯』（太白社、昭和五（一九三〇）年）に「鏡花礼讃」という歌題の下に「うま酒のくがだち酒のたぎち酒鏡花小史に酒たてまつる」など八首がまとめられており、『短歌風土記　大和の巻（一）』（創元社、昭和二十一（一九四六）年）には「丹波市の天理図書館にて、鷗外先生の手簡を見出で、観潮楼歌会のころを思ふ」として「鷗外手簡」の歌題の下に十首がまとめられている。

（10）昭和三十二（一九五七）年に『日本経済新聞』に連載。いま『私の履歴書　文化人1』（日本経済新聞社、昭和五十八（一九八三）年）再録のものに拠った。

（11）「或る転機」の章に「『みだれ髪』読みて作者の情熱にうつら酔ひぬしわれにやはあらぬ」「独歩忌の六月二十三日にはおもひでの歌われもつくらむ」などの歌があるのは、そのことを象徴的に示していよう。

附、臼井書房版『生ひたちの記』独自歌

（仮名遣いは原文のままだが、漢字は新漢字に改めた。ただ「寄席通ひ」の三首目は「燈」「灯」の使い分けがあるので、そのままとした。末尾に臼井書房版の頁数を附した）

第二篇第二章　骨牌の思ひ出

少年のこころ市井（しせい）にあこがるるころともなれば春雁（しゅんがん）の来る（九一頁）

第四篇第一章　即興詩人

人の世のまことを知らむこころより誘惑の手を待てるならぬか（一五六頁）

第四篇第二章　寄席通ひ

即興詩人はじめて読みし感激を思ひ出せばいまも胸鳴る

南欧の恋物語かなしくていくたび深き吐息つきけむ（以上一六五頁）

いまもなほむかしを思ひ出でしむる寄席行燈（よせあんどん）の灯あかりもがな

いまの世もアヌンチヤタをば見むものとわれや夜毎に寄席通ひすも

むかし聴きし説経節の「苅萱」の声のほそさも忘られなくに

（以上一六六頁）

木戸あかり下足の札の音にさへ胸ときめかす吾なりしかな

寄席通ひ夜毎にしたりわが鏡花ゑがく世界に住めるここちに

夕戸出の夢見ごこちに聖（ひじりざか）坂伊皿子坂をくだりけるかも（以上一六九頁）

しみじみと照葉狂言読みたるも身につまさるることあればこそ

君が名のあらざる寄席の看板はさびしきものか冬雨も降り

（以上一七〇頁）

第四篇第三章　或る転機

寂しさのはてを極めむねがひ持ち病ひの床のしづけさに居り

わが胸の浪のひびきとかの海の潮（うしほ）の音（おと）といづれさびしき

松林尽くれば砂の丘ありきかかる景色をいまだ忘れず

わが辿る人生の路しらじらと見えて寂しき夜半なりしかな

（以上一七三頁）

思ひ出は悲しきものか亡き人のたましひのごと白き蝶飛ぶ

（一七四頁）

運命の丘と名づけし砂山にわれ日ごと来てものを思ひぬ（一七六頁）

「みだれ髪」読みて作者の情熱にうつら酔ひゐしわれにやはあらぬ

歌つくることを幸とし半生のなげきかなしみなべて忘れむ

由比ヶ浜その渚辺にわれありて波とたはむる風とたはむる

過ぎし日のなげきのいろになほ咲くや滑（なめりがは）川辺のなでしこの花（以上一七七頁）

あはれなる歌をつくるも人の世の幾起伏（いくおきふし）のいやはてにして

運命の不思議に思ひあたるときわが目おのづと睜（みひら）かれつつ

（以上一八〇頁）

独歩忌の六月二十三日にはおもひでの歌われもつくらむ

あへぎあへぎわが辿り来し人生の路を思へば蹉跎（さだ）たるかなや

鎌倉の海の遠鳴いまもなほ聴こえ来るかと耳を傾く（以上一八二頁）

（後記）吉井勇関係資料の閲覧に御高配を賜った京都府立京都学・歴彩館に厚く御礼申し上げます。

（たさか・けんじ）